Case study

実践事例2

愛知県立東海商業高校

多様な資質・能力を身につけることで、自信を持たせ、自分らしく社会で活躍し続けられる人材を育成する

愛知県立東海商業高校は、社会の変化や生徒の進路の多様化に伴い、近年、教育活動の改善に取り組んでいる。社会で求められる資質・能力を身につける中で、個々のよさを発揮させて自信をつけ、長所を伸ばす指導を重視することで、卒業後に自分らしく、社会で活躍し続けられる人材の育成を目指している。

社会で必要な力を育む中で自分の強みに気づかせる

愛知県立東海商業高校は、2020年度に創立50周年を迎える、県下で最も新しい単独商業高校だ。卒業後に就職する生徒が多いため、社会を生きていく上で必要な心構えやスキルを育むよう、力を入れてきた。佐藤裕子（ひろこ）校長は、「商業教育は、『人づくりの教育』だ」と語る。

「商業教育は社会に直結した教育です。本校では、挨拶の習慣や礼儀作法、マナーを身につけさせるだけでなく、自己のあり方や生き方を問いかけ、考えさせる指導を大切にしてきました」

近年、同校の生徒の進路は多様化しており、90年度は就職90％、4年制大学進学1％だったのに対し、19年度はそれぞれ64％、16％と大きく状況が変わった。以前は、入学時から高校卒業後に就職することを希望している生徒が大半だったが、今では、進学と就職のどちらにするか迷って同校を選ぶ生徒が多く見られるようになった。

そうした変化に伴い、進路指導も様変わりした。以前は、安定した企業から内定を得るための指導が主流だったが、近年は、自身の適性、自分が望む人生のあり方や生き方をじっくり考えさせながら、社会で求められる資質・能力を身につけ、最終的に自分に合った進路を実現させる指導に力を注ぐ。小川浩司（こうじ）教頭は次のように説明する。

「進学、就職にかかわらず土台となる基礎学力とともに、経済産業省が定義した『社会人基礎力』を高める指導に力を入れています。同時に、生徒に自身の特性や強みを発見・再確認させ、自分らしい生き方を見つけて、卒業後も活躍し続けられる人材の育成を目指しています」

「社会人基礎力」や文部科学省の「基礎的・汎用的能力」を基に整理した14項目について、各学年で年2回、自己評価させる生徒アンケートを16年度より実施している（**図1**）。

「1年生は希望を抱いて入学するため、全体的に数値が高いのですが、2年生は高校生活の中で課題に直面して低評価となります。そうした期間には、生徒の意欲を高める指導や働きかけをしっかり行います。すると、3年次には、高い自己評価をつけ、卒業していく生徒が多く見られます」（小川教頭）

生徒アンケートで把握した課題を基に、指導を検討

同アンケートを始めてから、教師は生徒の実態をより的確に把握できるようになった。1学年担任の戸田和佳代（わかよ）先生は、次のように述べる。

「教師が感じていた生徒の強みや

課題が目に見える数字で表れたことで、課題を克服したり、強みをさらに伸ばしたりする取り組みを検討しやすくなりました」

19年度の1年生は、入学当初、「課題対応能力」の低さが課題だったため、学年団で検討した結果、夏季休業中に「テーマ別探究」に取り組ませることにした。SNSの恩恵や危険、AIが人生に与える影響、ラグビー日本代表の躍進の理由、マイクロプラスチックゴミの問題、世界の難民問題など、教師が設定した20のテーマの中から、「自分に足りないこと」「自分にさらにプラスになること」などの観点で1つを選んだ上で、そのテーマについて書籍やインターネットで調べて、分かったことや自分の意見をまとめさせた。

「一見すると、うまくまとまっているのですが、あたり障りのない内容が多く、意見や感想に自分らしさが見られないことが課題と感じました。各自のまとめは教室に掲示し、ほかの生徒と比較できるようにすることで、自分の課題に気づけるようにしました」（戸田先生）

自分らしい考えを生み出し、それを表現する力を高めるために、2学

校長
佐藤裕子
さとう・ひろこ
教職歴34年。同校に赴任して1年目。

教頭
小川浩司
おがわ・こうじ
教職歴31年。同校に赴任して4年目。

進路指導主事
新美廣勝
にいみ・ひろかつ
教職歴28年。同校に赴任して5年目。商業科。

1学年主任
中村普章
なかむら・ひろのり
教職歴10年。同校に赴任して7年目。数学科。

1学年担任
戸田和佳代
とだ・わかよ
教職歴13年。同校に赴任して10年目。商業科。

進路指導部
友澤恒平
ともさわ・こうへい
教職歴10年。同校に赴任して3年目。情報科。

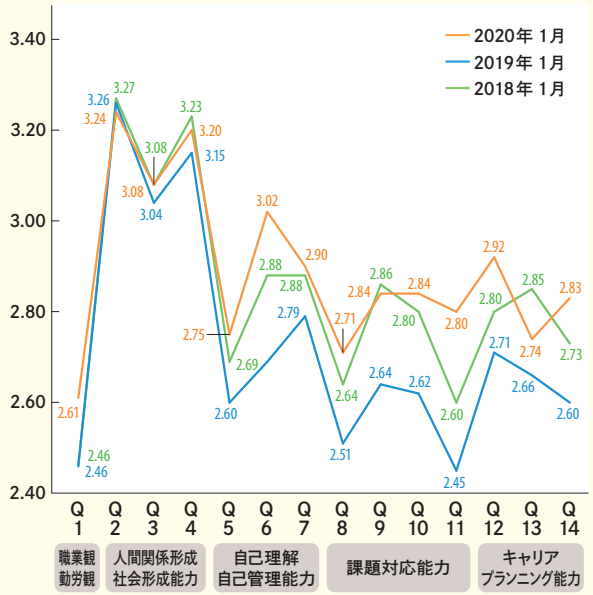
愛知県立東海商業高校

◎校訓「聡・慈・健」の下、「前に踏み出す力」「考え抜く力」「チームで働く力」を高め、社会貢献できる人材を育成。地域貢献活動に積極的で、生徒が「課題研究」で考案したキャラクターは、「東海市まちづくり応援大使」として市民に親しまれている。
◎設立　1971（昭和46）年
◎形態　全日制／総合ビジネス科・情報科／共学
◎生徒数　1学年約280人
◎2019年度進路実績（現役のみ）　国公立大は、青森公立大、北九州市立大に2人が合格。私立大は、愛知学院大、愛知大、南山大などに43人が合格。短大、専門学校進学56人。就職182人。
◎URL　https://tokai-ch.aichi-c.ed.jp/

図1　2017年度入学生の生徒アンケート結果（3年間推移）

同校では、経済産業省の「社会人基礎力」や文部科学省の「基礎的・汎用的能力」を踏まえて、育成を目指す資質・能力を設定し、全学年の生徒にその獲得状況を自己評価させるアンケート調査を実施している。過去数年間の調査結果から、周囲の人との関係を大切にしながら物事に取り組む力は高いが、指示されずに行動する力や、苦手なことに進んで取り組む力が弱いことが分かってきた。そうした生徒把握が、同校の3年間の指導の裏づけになっている。

■2017年度入学生　学年推移



＊学校資料を基に編集部で作成。

職業観 勤労観	Q 1	働くことに対して不安や緊張感はなく、社会に出ることを楽しみにしている
人間関係形成 社会形成能力	Q 2	相手の考えや意見を聴き、理解しようとしている
	Q 3	自分の考えや気持ちを整理して伝えようとしている
	Q 4	周囲の人と力を合わせて行動しようとしている
自己理解 自己管理能力	Q 5	指示されたことだけでなく、自分で考えて行動できる
	Q 6	自分の興味や関心、長所や短所などについて自分で分かっている
	Q 7	自分の感情に流されずに、規則を守り、何事も取り組むようにしている
課題対応 能力	Q 8	苦手なことでも、自分の成長のために進んで取り組むようにしている
	Q 9	調べたいことがある時、自ら進んで資料や情報を集めるようにしている
	Q 10	解決する問題や課題があった時、原因を考え、解決方法を工夫している
	Q 11	計画的に物事を進めたり、改善を加えて実行したりしている
キャリア プランニング 能力	Q 12	学ぶことや働くことの意味について理解するようにしている
	Q 13	学校での勉強と自分の将来をつなげて考えるようにしている
	Q 14	自分の将来について目標を立て、その実現のための方法を考えている

＊プロフィールは2020年3月時点のものです。

期以降はクラスメートの前で発表する機会を多く設定した。さらに、2年次の夏季休業中などにも同様の探究学習に取り組ませる考えだ。

生徒アンケートの自己評価結果は、学年共通の取り組みにとどまらず、教科学習や特別活動などにおける教師の指導にも生かされている。例えば、1学年主任の中村普章先生は、生徒の主体性に課題が見られたため、部活動の指導を見直した。

「生徒自身に練習メニューを考えさせたり、試合後の振り返りで課題を見つけさせたりするなど、自分たちで考えて活動の質を高めていくプロセスを取り入れました」

模擬会社を運営する活動で社会で活躍する自分をイメージ

社会への理解を深め、自分の生き方を考える機会となるのが、2年次のインターンシップだ。

「インターンシップでの経験や気づきは、クラス内で発表します。発表では、『こんな勉強をしたい』『日常生活でも頑張りたい』といった前向きな言葉が多く聞かれ、そうした生徒の姿からほかの生徒が刺激を受ける様子も見られます」（戸田先生）

写真　教室に模擬的な市場をつくり、実践的・体験的学習を通じて、経営活動を主体的・合理的に行う能力と態度を育成する。

社会で自分がどのように活躍するのかをイメージする場となるのが、3年次の「総合実践」だ。生徒はグループをつくって製造、小売、卸売などの模擬株式会社を設立し、1年間を通して会社経営を行い、最後に決算書を作成する（**写真**）。簿記を始めとした商業科目の広範な知識が必要になるだけではなく、自分がするべきことを考えた上でグループのメンバーと円滑にコミュニケーションをとったり、他社と交渉したり、自社の問題を解決したりと、まさに社会で活躍するために求められる様々な力が磨かれていく。活動が停滞しているグループに対しては、教師が「次に何をしたらよいと思う？」と、生徒自身で考えることを促す。

「多くの生徒が自分にできることを考える中で、自分の強みを自覚するだけではなく、知識やスキルの不足に気づき、『もっと勉強しよう』という気持ちになります」（戸田先生）

3年次の1年間を通して全生徒が取り組む「課題研究」も、生徒がグループで協働して課題に取り組む体験的な学びだ。「観光と地域資源活用」「ファイナンス講座」「商品開発と英語でのプレゼンテーション」など、19講座が開設され、地域社会と密接にかかわりながら活動を進める。最終的にグループごとにプレゼンテーションを行い、選抜されたグループは、行政や企業の関係者などを招いた場で成果を発表する。

「『課題研究』は『人づくりの教育』の集大成と言えます。大きな課題に取り組み、その結果を発表する過程で、生徒は教師の想定を超える成長を見せてくれます」（佐藤校長）

自分らしく活躍できるように生徒のよさを見つけ、発揮させる

多様な活動に生徒が取り組んでいる同校だが、自分らしく、主体的に活動するためには、自尊心や自信が欠かせない。だが、進路指導主事の新美廣勝先生は、入学時に自分に自信を持てていない生徒が少なくないと感じているという。

「本校は、中学校時代の成績が中間層の生徒が集まっていますから、一人ひとりのよさを丁寧に見つけて褒めていけば、生徒は自信を持ち、学校も好きになります。そのため、学年を問わず、生徒の長所を見つけ、発揮させる方針としています」

例えば、学年ごとに室長の生徒が集まる「室長会議」を定期的に実施しているが、そこで大切にしているのは、室長が自分のクラスの近況報告をする際に、よいところを中心に語るということだ。そうした配慮は、担任が生徒に係や委員会などの役割を持たせる際にも見られる。

「カメラが趣味の生徒にクラスの記録係を任せたところ、年間を通して主体的に動いてくれました。また、絵を描くことが好きな生徒にクラス旗の制作を担当してもらうなど、生徒の得意分野を生かせる役割を与えて、達成感を味わわせるようにしています」（中村先生）

簿記や情報処理検定などの資格・

検定試験対策の学習を通じた成長も生徒の自信になっている。

「合格を勝ち得る成功体験は、その後の学びの大きな動機づけになります。ただ、結果以上に大切なのが、自分で計画を立てて学んだり、失敗から再起したりといった経験です。そこで生徒は、将来につながる成長を見せます」（佐藤校長）

同じ資格取得や検定合格を目指す生徒はグループで学習に取り組み、励まし合う中で一体感が高まり、協働して1つのゴールに向かっていく力も身につけていく。

生徒が自分を客観視するために多面的な評価をカルテ化

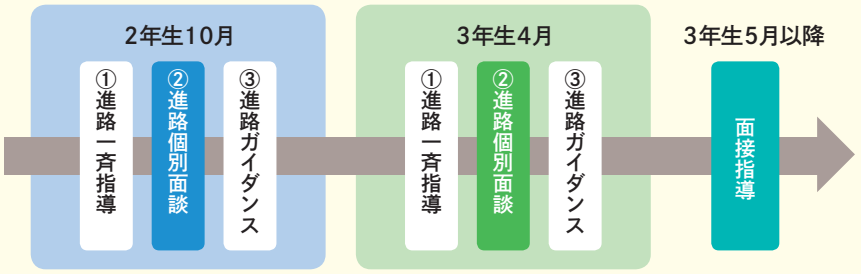
社会とのかかわりを考えながら自身の強みをメタ認知させる3年間の指導が、進路実現の素地となる。同校の進路指導は、「進路一斉指導」「進路個別面談」「進路ガイダンス」の3本柱で構成されている。2年生10月、および3年生4月にそれらを実施し、3年生5月以降の面接指導につなげて、一人ひとりの最適な進路実現を図る（**図2**）。

進路一斉指導では、それまでの希望はいったん白紙に戻すように生徒に伝え、多様な進路先を提示した上で、進路先が求める人材像、高卒就職と大学進学のメリット・デメリットなど、生徒と保護者に共通の情報を提供して「目線合わせ」を行う。次のステップである進路個別面談では、できるだけ進路可能性を広げる方向で、生徒の話を聞く。そして、進路ガイダンスでは、進学・就職に分かれ、それぞれ外部講師の話を聞くことなどを通じて、希望進路の理解を深めさせる。

「3本柱のサイクルを2度回す中で、生徒の希望を聞きながら、『どう生きていきたいのか』といった人生観を語らせ、具体的な進路に結びつけていきます」（新美先生）

生徒個々の多様な資質・能力を見取る多面的な評価の結果を、個別にカルテ化するシステムづくりも始まっている。運用にあたっては、学校独自のアンケートや外部アセスメントの活用を考えていると、進路指導部の友澤（ともざわ）恒平先生は構想を語る。

図2　2年生秋からの進路指導の流れ



①進路一斉指導
進路のマッチングの考え方について、全生徒・保護者と共通理解を図る

②進路個別面談
生徒個々に進路可能性を広げる、もしくは本気度を迫る面談で、進路のマッチングを図る

③進路ガイダンス
進学希望者には分野別に、就職希望者には複数の大手企業等の人事担当者とのガイダンスを行う。3年次は、その後の面接指導で希望進路の理解を深める

＊学校資料を基に編集部で作成。

「公開する情報を生徒用と教師用とに分けた上で、双方がいつでも見られる状態にします。多角的なデータや情報を一覧化することで、生徒は自分を客観視しやすくなりますし、すべての教師が同じ情報を共有した上で1人の生徒を指導できる利点もあります。20年度の3年生から、実際にデータを蓄積してカルテ作成に取り組む予定です」

生徒の今後の人生を見据えた時、多くの教師が感じているのが、失敗経験の必要性だ。戸田先生は日直日誌に、「幸せとは何か」というテーマで生徒全員に記述してもらったことがある。

「生徒の8割は『今が十分に幸せ』と書きました。それはよいことかもしれませんが、現状に満足せず、挑戦し続け、苦労や失敗を経験することで、幸せの輪郭がもっとはっきりしてくるのではないでしょうか」（戸田先生）

本来、学校は失敗が許される場所であるはずだ。自尊心や自信を持った生徒が自分の可能性に気づき、積極的に挑戦して価値ある失敗を経験できるような指導体制を構築したいと、同校の教師は考える。

「ここ数年、教師自身が指導改善のチャレンジを続けてきました。その姿勢から感じることがあったのか、生徒たちも少しずつチャレンジする姿勢を見せ始めています。これからも教師や学校が挑戦し続けることで、生徒に失敗する勇気を与えていきたいと思います」（小川教頭）